上町台地界隈の情報紙
うえまち
揮毫 「心寺」長老 森口恭行 師
2021年7・8月号
号外 2021 8
発行：NPO法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX.06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
✉uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

四天王寺 二〇二三年 聖徳太子一四〇〇年御聖忌記念 新縁起

第26回

大坂冬の陣と四天王寺焼亡

四天王寺 勧学部
文化財係主任・学芸員
一本崇之

四天王寺に一通の「禁制（きんぜい）」が残されています。

これは、関ヶ原の合戦から4日後の慶長5（1600）年9月19日に、徳川家康が四天王寺に発給したものです【写真】。寺領での狼藉（ろうぜき）や放火、農作物の搾取や竹木の伐採を禁じる内容ですが、実質的には四天王寺が家康の統制下に置かれたことを意味するものでした。豊臣秀吉亡き後、関ヶ原の合戦に勝利した家康は天下の実権を掌握し、その地位を強固なものとしていきました。四天王寺は豊臣家によって再建された寺ですから、いまだ「豊臣の寺」の印象が強い中、徳川の影響の広がりをまざまざと示す事例といえます。

慶長8（1603）年に江戸幕府が成立し、慶長10（1605）年には家康が将軍職を嫡子の秀忠に譲ることで、徳川家による政権の世襲を天下に知らしめました。これは、豊臣の世が徳川にとって代わったことを意味します。

一方で徳川にとって、安定した政権の妨げとなりうる豊臣の存在が次第に脅威となっていきました。慶長19（1614）年5月に前田利長（利家の長男）が亡くなると、豊臣家はますます孤立し、政権を奪われた不信感から幕府との溝を深めていきます。そして、かの方広寺鐘銘事件をきっかけとして、両者の対立は決定的なものとなりました。

同年10月より豊臣秀頼は合戦の準備に着手します。豊臣方は戦の長期化によって徳川軍を疲弊させ、有利な講和を引き出すため、堅牢な大坂城に籠城する作戦をとりました。対する徳川軍は、大坂城の四方を囲むように陣を固め、家康が茶臼山（天王寺区）に、秀忠が岡山（生野区・御勝山古墳）にそれぞれ陣を構えて戦に備えます。

11月6日、戦の開始に向けて両者がにらみ合う中、突如、徳川陣営の砦で、大きな火の手が上りました。何者かによって放たれた火によって、四天王寺の伽藍が炎上したのです。

四天王寺が茶臼山と岡山の中央にあったことから、戦の見通しの妨げとなるため徳川方が焼き払ったという記録もありますが、実際には、徳川方を脅かすため、豊臣方が兵を出して、四天王寺周辺の民家を焼いたことが原因のようです。この火は、折からの強風によって四天王寺の太子殿に燃え移り、瞬く間に伽藍が焼失してしまったといいます。

こののち、11月19日の木津川口の戦を皮切りに、大坂冬の陣の合戦が開始されます。12月20日に和議が成立し戦は一旦終息しますが、それを待たずして、豊臣によって再建された伽藍はわずか14年で失われたのです。

『徳川家康禁制』四天王寺蔵

上町台地界隈の情報紙
うえまち
揮毫 「心寺」長老 森口恭行 師
2021年7・8月号
号外 2021 7
1面 …7月号
2・3面…第14回 夕陽丘うえまち写真コンテスト受賞作品
4面 …8月号

四天王寺 二〇二三年 聖徳太子一四〇〇年御聖忌記念 新縁起

第25回

慶長の再建

四天王寺 勧学部
文化財係主任・学芸員
一本崇之

天正4（1576）年5月3日の四天王寺伽藍焼失を受け、これを大いに嘆いた正親町（おおぎまち）天皇は、さっそく同月10日に綸旨を発して再建を命じます。しかし、実際に再建が動き出したのは、本能寺の変で信長が亡くなって以降であったようです。

天正11（1583）年11月、秋野来迎院享順による四天王寺再興の勧進をかわきりに、堺年、南都の絵師・壮田座（はんだざ）侍従が金堂におもむいて、本尊救世観音造立のために絵像を描くなど、再建への準備が進められていきました。天正17（1589）年4月には、秀吉の正室・北政所が、四天王寺五重塔再建のために大工を法隆寺に派遣し、塔の指図を写させています。当初は、法隆寺五重塔を参考に新築する予定だったようですが、結果的に平群郡額田部（現在の奈良県大和郡山市）の額安寺の五重塔を移築しています。この事情ははっきりしませんが、工事の効率化に加えて、聖徳太子の創建になり、四天王寺別当を務めた叡尊・忍性とも深い関わりのある額安寺の由緒にちなんで、移築という方法をとったのかもしれません。

文禄3（1594）年になると、伽藍の建造工事がはじまります。秀吉は、金堂・講堂・太子堂・六時堂・食堂・五重塔・仁王門・南大門・西門・万灯院・鐘楼・求聞持堂（ぐもんじどう）の造営について、必要な経費と担当奉行を指定し、ひとつの堂宇に専念することによって、工事の迅速化を図りました。四天王寺には、この指示書となる、秀吉自筆の「四天王寺造営目録」が残っています。

秀吉は慶長3（1598）年に亡くなりますが、その後は秀頼が事業を引き継ぎます。そして慶長5（1600）年3月27日、四天王寺は再建され、盛大な落慶供養が行われました。再建された伽藍は、それはそれは絢爛豪華なもので、相国寺僧・鶴峯宗松は、「光輝く朱塗りの金堂の美しさに驚愕した」と日記に記しています。

この再建では、建物だけではなく、法要に用いる道具なども多く寄進されました。慶長4（1599）年銘のある行事鉦のほか、慶長17（1612）年の箱書がある太平楽皆具など、慶長4年から十数年にわたって、継続的に舞楽所用具が新調されていったことがうかがえます。また、聖霊会などの大法会に用いられる角盥（つのだらい）や袈裟箱は、大ぶりな五七桐紋の入った高台寺蒔絵の作品で、豊臣家寄進であることを雄弁に物語っています。

残念ながら、この慶長再建時の伽藍は大坂の陣の兵火ですべて失われてしまい、その全貌を知ることはできません。しかし、巨大な鼎太鼓（だいこ）や、太平楽皆具にみる豪華な装飾は、桃山時代の気風を今日に伝えています。

聖霊会所用 角盥

相羽秋夫の

上町らくご植物園

植物が登場する言葉を取り上げ、淡交新書著者の相羽さんならではの面白い視点で読み解きます。

第27折

上方落語「牡丹茶屋」

カウスの相方―牡丹

金持ちの旦那が茶屋に遊びに行く。芸妓や幇間の所望で、一曲踊ることになった。旦那は、長唄「石橋（しゃっきょう）」を得意としていたので、さっそく準備にとりかかるが、肝心の石の橋がない。そこで幇間に「橋をやってくれ」と頼み、「牡丹の花の、今や咲くやと……」と地方（じかた）に合わせて踊る。橋の役をやらされた幇間は、ふと見ると大好きな寿司が目の前にあるので、たまらず口にする。それを見た旦那「なにをしておる！」と怒ると、幇間「寿司（鮨子）に牡丹」。

立てば芍薬（しゃくやく）座れば牡丹、歩く姿は百合（ゆり）の花――最高の美人の理想像を花に例えて表現したこの諺は、江戸中期の踊り歌から発したものとされる。

牡丹の原産地中国では「花の王」と称され、二十日草（はつかぐさ）・深見草（ふかみぐさ）・名取草（なとりぐさ）、あるいは山橘（やまたちばな）などの異名がある。根の皮は漢方の生薬として、頭痛や腰痛・婦人病に効くとされている。花の色は、基本は紅だが白色もあり、高浜虚子は「白牡丹といふといへども紅（こう）ほのか」と詠んだ。蕪村の「牡丹散（ちり）てうちかさなりぬ二三片」は有名な句だ。また「牡丹切りて気の衰ひしゆうべかな」の句もある。

「牡丹餅（ぼたもち）」は、もち米やうるち米を炊き、軽く搗（つ）いて小さく丸め、小豆（あずき）の餡（あん）をまぶした餅のことで、牡丹の花に似ているところから命名された。同じ餅が萩の咲く頃になると、萩の餅・お萩と称する。

「牡丹鍋」は、猪の肉をメーンにした味噌味の鍋で、冬の味覚の一つ。しし鍋ともいのししし鍋とも称する。紋所（もんどころ）に「牡丹唐獅子（からしし）」があって、牡丹と獅子（猪）を関連させて鍋の名が付いた。「牡丹卵（たまご）」という料理もある。熟した胡麻油の中に鶏卵を割って落とし、白身が黄身を囲むように広がった、牡丹の花に見たてたものを言う。「牡丹蝦（えび）」は、美味なエビとして定評がある。と、どこまでも味に縁が切れない牡丹である。

―「牡丹」と掛けて富士山と解く、その心は雪が美しい。

相羽秋夫の

上町らくご植物園

植物が登場する言葉を取り上げ、淡交新書著者の相羽さんならではの面白い視点で読み解きます。

第26折

東京落語「蒟蒻問答」

裏表がない―蒟蒻（こんにゃく）

道楽者の男、上州（群馬県）安中（あんなか）の宿、蒟蒻屋に居候している。ひょんなことで近くの寺の住職になる。お経も読めないまま、毎日酒を呑むだけの生活。そこへ永平寺の雲水の僧が突然訪れ、禅問答を求める。困り果てていると、蒟蒻屋の主人が引き受けてくれ、雲水との問答が始まる。しかし主人は、店の商品の悪口を言われているものと誤解し、怒って無言を貫いている。相手は「拙者の及ぶところではございません」と、勝手に解釈して去って行った。

「蒟蒻の裏表でどちらか分からない」とか、「蒟蒻の木登りで提え上がる」といったユーモラスなオチになる。

隠語の世界でも、形から連想して舌や布団を表わしたり、裏表が分からないことから行方不明の代名詞に使われる。理由は定かではないが私娼を指すこともある。川柳の「蒟蒻が過ぎて俥（せがれ）は役立たず」となると、蒟蒻は吾妻形（あずまがた）の代用品になる。吾妻形の意味は、各人でお調べあれ。

―「蒟蒻」と掛けて、食べ物を明日まで残さないと解く、その心は。今夜食（こんやく）う。

「蒟蒻の水車」との諺がある。ともに。提える。イメージから、ぶるぶる震えている様を例える時に用いる。しゃれ言葉では、

大人のための文章教室

ライター・編集者 松本正行

「能動か受動か」それが問題だ

新型コロナウイルスの拡大によって、観光業や飲食業の土台を崩しかねない。

さっと読むだけだと見逃してしまうかもしれませんが、前後が微妙にかみ合っていません。これは能動と受動の問題で、「拡大によって」をそのまま使う場合、後半は受動の形にする必要があります。逆に「崩しかねない」をいかすのなら、「拡大によって」ではダメ。主語を明示し能動態にしなくてはいけません。

◀

(1) 新型コロナウイルスの拡大によって、観光業や飲食業の土台は崩されかねない。

(2) 新型コロナウイルスの拡大は、観光業や飲食業の土台を崩しかねない。

能動と受動にはどちらを使うべきかという問題もあります。能動態は「誰がどうする」「何が何だ」とシンプルで読み間違いがないため、実用文では「能動にすべし」と言われます。一方、受動の文は行為の主体が明示されなくてもよいため無責任になりがち。「～と思われます」などはその典型です。「ここぞ」という時は能動で！覚えておきましょう。

※本連載は「うえまち号外」掲載分以外も、Webで一覧いただけます（ノート うえまち）で検索。

上町台地にある高津高校のOB。1000を超える取材経験をもち雑誌、webを中心に活動中。NPO法人「まち・すまいづくり」会員。

NPO法人「まち・すまいづくり」活動報告

各種予約・お問い合わせはNPO法人「まち・すまいづくり」まで
TEL:06・6779・7222

住まいと暮らしの無料相談会

7月10日（土）・9月11日（土）
各10時～12時

大事なことなのだけど、なかなか日常生活では相談できない住まいと暮らしの「困った！」はありませんか？

住まいと暮らしの無料相談会には当法人会員の弁護士、司法書士、税理士、宅地建物取引士、一級建築士といった専門家が出席。専門知識を生かした相談に応じます（8月はお休みします）。

場所：大阪市立社会福祉センター（大阪市天王寺区東高津12・10）

「上町台地名所百景」発売中

「うえまち」15周年記念企画「上町台地名所百景」を上製の地図にしました。定価は400円（税込）で、大阪歴史博物館のミュージアムショップで販売しています。

うえまち寄席

8月28日（土）14時開演

5月に予定していた「第34回うえまち寄席」は緊急事態宣言の延長に伴い、8月に開催します。

場所：一心寺南会所
入場料：2000円

電子チケット販売サイト「TIGET（チケット）」からも予約可能です。

第14回
夕陽丘うえまち写真コンテスト受賞作品

～北は大阪城から南は住吉大社まで～
緑豊かで、歴史と文化いっぱいの上町台地。
その風景や、そこに暮らす人々の姿を写真という一篇の「詩」にしていただく…
写真というものを通じて、この地域の素晴らしさを再発見したい！
そんな想いの写真コンテストです。

主　　催：夕陽丘うえまち写真コンテスト事務局
応募総数：102名・252作品（一般190作品・学生62作品）
審　　査：江口保夫（フォトキョイ）、清水ミサコ（ラメカカメラ堂）、
田中一泉（日本写真映像専門学校）、高口真吾
（一心寺文化事業財団 理事）、高口恭行（一心寺 長老）

審査員総評

審査委員長　江口保夫（フォトキョイ）　受賞の皆様、おめでとうございます。

コロナ禍において、撮影場所や撮影回数などで大変ご苦労なさったことと存じます。そのような中、応募点数が昨年の半分ということで心配しましたが、皆様の作品はバラエティーに富み、レベルもかなりのものでした。審査員一同、楽しく審査・選考させていただきました。来年15回目も皆様の素晴らしいアイデアある力作をお待ちしております。

審査員　清水ミサコ（ラメカカメラ堂）　受賞された皆様、誠におめでとうございます。

昨年度よりも応募数は減っていますが、全体の作品の質は変わりないように感じました。大きなイベントが中止になる中、これだけの幅広い作品を応募された皆様に心より敬意を表します。今回の選考で特に感じたことですが、作品の質の高さに加え、プリントの質のレベルが年々高くなっているようです。受賞作品を見ると、プリントまでを考慮して完成された作品が多くなっています。

その一方、全252作品の中には、とても心魅かれる写真だけれど、残念ながら選ぶことが叶わなかった作品も多数ありました。その大きな理由の一つが、見せ方であると思います。色や明るさ、コントラストを調整してきちんと写真用の印画紙に出力したものは、やはり選びやすいのです。構図をギリギリまで詰める、作品に見合ったサイズにプリントするなど、ほんのひと工夫があればなおよいのです。

特にモノクロ写真。今回も数点応募いただき、どれも力のある作品でしたが、受賞には至りませんでした。そこには作品の意図を伝えるプリント作成の難しさもあると思います。カラー写真は色の情報に頼れますが、モノクロは厳密な構図や明るさやコントラストに加え、微妙な濃淡が必要です。非常に難しいですが、今後も挑戦していただければ幸いです。

2021年もコロナの影響で撮影の機会は少ないと思いますが、新たな挑戦を試みた作品をお待ちしております。

審査員　田中一泉（日本写真映像専門学校）　撮影場所が限られるなか、豊富な視点の作品が多く、とても感動いたしました。

受賞作品は、応募作品の中でもユーモア性・ストーリー性・時代性などが特に優れており、作者の皆様とぜひお話をしてみたいと感じました。しかし、中には主題となり得る被写体がわかりにくい作品が見受けられました。撮影したい主題が、美しい空間なのか、人の表情なのか、その辺りを再考しつつ撮影、またはセレクトしていくと作品のグレードが上がるかもしれません。

高校生の作品には若々しさを感じない作品も多かったです。しかし、大人の私が求める高校生らしさ、というモノに囚われて作品を見るわけにはいかないなと思いました。今の時代を生きる彼ら彼女らの写真を見ることができて、とても楽しかったです。

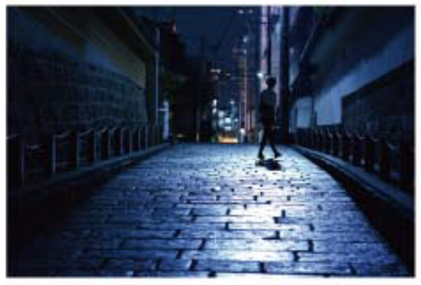
最優秀作品賞・上町台地パンフ賞

「幸せの園へ」
加藤秀行

池の水面に映える桜を撮影していると突然水鳥が飛び立ち、それはあたかも幸せの桜の園への旅立ちのように思えました。

江口保夫（フォトキョイ）以下江口　今回の作品の中で、かなり目立った写真でした。今までのこのコンテストでは見られない洗練された作品と言えます。大阪城の素晴らしい場所と季節、時間を見事に切り撮られた私好みの写真です。

七坂賞



「源聖寺坂ダンス」
中田一葉

雨上がりの源聖寺坂にて友人を撮影。石畳に街灯が反射し、何とも言えない一枚になりました。

田中一泉（日本写真映像専門学校）以下田中　いい作品には気配が写ります。この作品からはそれを感じました。地面のディテールが湿気ている様子なのも気配を引き立てます。

一心寺賞

「一心寺、やわらぐ春」
高橋一吉

一心寺には縁の深家の関係で毎年数回お参りします。春の桜に囲まれた境内が一番大好きです。人々も穏やかな季節を満喫していました。

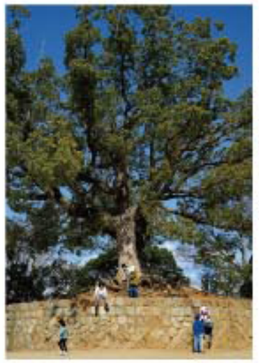
清水ミサコ（ラメカカメラ堂）以下清水　誰にでもオープンな一心寺の良さが凝縮された一枚です。平和で温かくやさしい。そんな気持で眺めることができる安心さが魅力です。

上町台地パンフ賞

「明日に向かって」
国子克樹

昨年5月の緊急事態宣言が関西でも解除され大阪モデルの緑信号を表す通天閣。先行きの見えない不安や自粛、閉塞感のある中、子どもたちは夕陽を眺め、ただただ「きれいな夕陽」と言っている姿に力をもらった気がしました。

田中　非常にドラマティックな写真です。ポートレートにおいて「目」はとても重要な要素です。しかし、この作品には「目」が写っていなくても、未来に向かう強さと決意を感じました。



「古のランドマーク」
田中雅之

聖天山公園にある古墳…削り取られて現在は子供たちの遊び場になっています。その場所には背景のハルカスを隠すように大きなクスノキが立ち、そこが古墳であったことを記しているように思えました。

清水　大きな樹と小さな人間の対比が面白い。うえまちにはこのような樹が多く残っているなと気づかされ、数え切れないほどの人間の憩いになったのだと思わせる壮大な一枚。

「佳日」
中村峰雄

お父さんが慣れない手つきでお子さんを抱く姿が初初しく見えました。

清水　何気ない一瞬の風景ですが、過ぎ去りし日々の中の幸せな思い出になり得る写真。これが狙って作れるものではないスナップ写真の良さです。

特別賞

「忘れ物？」
山村知憲

「ソーシャル・ディスタンス」
林宏行

「天空」
津田篤志

「飛翔」
松居正博

「神社に参り」
川根一雄

青春賞

「反映」
住友伸太朗

水たまりに映る人にのみこまれそうなジャストなタイミングだったのでこれにしました。

清水　被写体を直接撮影するのではなく、水面に映った姿を撮るのは、被写体の心を写したのか、それとも自分の心を写したのか。いい意味で謎さを抱いた写真。

「まだ道はある」
渡邊茅窟

道で立ち止まる友人のもとに駆け寄った男子高生。その瞬間を切りとった一枚が、励まし前向きに感じる一枚に見えました。

江口　赤い初辰まいりの幟に囲まれて、高校生らしい若者二人の動きを見事に捉えられました。青春を感じる明るい写真で、好感が持たれます。

「画面越しの春」
大久保玲花

きれいに咲き始めた桜たち。スマホに写った世界はいつも見ている世界と一味違うのかもしれません。

江口　スマホ画面を利用した面白い作品。ピントは見事に画面の中の桜の木に合わせて、人物もさり気なく入れておられます。更に、背景に枯葉をぼかして入れるなど、傑作ですね。

第15回夕陽丘うえまち写真コンテスト
作品募集中～ 2022.3.31
住吉大社～一心寺・下寺町～大阪城までの上町台地の風景や、そこで暮らす人々をカメラに収めてください。募集要項はホームページにて。応募用紙のダウンロードなども可能です。
夕陽丘うえまち写真コンテスト

スマホ賞　作品募集
大阪城～下寺町～住吉大社の風景や人、出来事をスマホで撮影しメールで送ってください！ 応募方法など詳細はホームページにて。
夕陽丘　スマホ賞

公式HP

【問い合わせ】
夕陽丘うえまち写真コンテスト事務局
〒543-0062
大阪市天王寺区逢坂2-6-13 B1F
一心寺シアター倶楽内
TEL:06-6774-2877　FAX:06-6774-4003
http://isshinji.net/pic/　kura@isshinji.net